

“京都をつなぐ無形文化遺産”

京の地蔵盆

～地域と世代をつなぐまちの伝統行事～

ハンドブック



目 次

京都市は、“京都をつなぐ無形文化遺産”として「京の地蔵盆」を選定しました……………	2
京の夏の風物詩「地蔵盆」……………	4-9
コラム 京都と地蔵盆 山路 興造 ……………	10
地蔵盆とお菓子 太田 達 ……………	11
地蔵盆の昔と今 松浦 俊海 ……………	12
かつて「地蔵盆」は——文献からみる地蔵盆行事……………	13
「地蔵盆」はいま——8割の自治会・町内会で実施……………	14-15
お地蔵さんと地蔵盆についていろいろなことがわかってきました……………	16-17



京都市長

かどかわ だいさく
門川 大作

「地蔵盆」は町内安全や子どもの健全育成を願う伝統行事であり、先人から受け継いできた京都の夏の風物詩です。

地域コミュニティの活性化に重要な役割を果たしている地蔵盆。子どもの頃の地蔵盆の思い出は皆の心に残っており、私も様々な場面を思い出します。

時代とともに変化しながら、守られてきた地蔵盆。このかけがえのない伝統行事を、これからも末永く引き継いでいきたいものです。

京都市は、“京都をつなぐ無形文化遺産”として 「京の地蔵盆」を選定しました

京都市は、京都に世代を越えて伝えられてきた無形文化遺産の価値を再発見、再認識し、内外に魅力を発信するとともに、大切に引き継いでいこうという気運を盛り上げるため、「“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」を創設し、平成 26 年 11 月、「京の地蔵盆 ～地域と世代をつなぐまちの伝統行事～」を選定しました。

「地蔵盆」は毎年 8 月中・下旬に行われる京都の伝統的な民俗行事です。「地蔵盆」は京都だけでなく、関西一円、全国各地で行われていますが、特に京都ではしっかりと残っており、「町内安全」や「子どもたちの健全育成」を願って、誰もが参加できる年中行事です。

「地蔵盆」がいつ始まったかはよくわかりませんが、江戸時代にはすでに行われていたことが数々の記録で明らかになっています。

江戸時代の京都は、今のように大きな通りがなく、道は狭く、町内ごとに木戸があり、夜になると木戸を閉めるような町の構造をしていました。その木戸のそば、つまり町内の端、隣の町内との境近くに、「お地蔵さん」がありました。その時代、都市の災害として一番怖かったのは、火災です。町内から火事を出さないよう、みんなで注意し合い、身近な「お地蔵さん」に毎日、安全をお祈りしました。また、昔は防疫や医療が発達していませんでしたから、生きる力の弱い子どもたちを守ってくれるよう、身近な「お地蔵さん」に毎日、手を合わせました。

その「お地蔵さん」を祀るお祭りは、各町内の主要行事の一つとして「地蔵祭」、「地蔵会（じぞうえ）」と呼ばれていました。

そのお祭りでは、今の「地蔵盆」でやられているような、「お地蔵さん」のしつらえやお供え、数珠回し、福引のようなことはたいてい行われていましたし、今ではあまり見られない「作り物（一式飾り）」や、大人たちが徹夜で宴会をするというようなこともあって、今よりもっと盛んなものだったようです。

明治のはじめ、日本は極端な欧化政策を取ります。路傍のお地蔵さんも迷信の象徴のようにいわれ、廃仏毀釈の一環として「地蔵会をやめ、道路から地蔵堂を撤去せよ」という命令が出ます。その後、京都のまちの道路を拡幅して、京都を近代都市に改造するという動きとも相まって、地蔵堂が壊され、お地蔵さんが埋められたりしました。ただ、明治の中ごろになると、お地蔵さんが土の中から掘り起こされて、小さな祠が用意され、町内単位で「地蔵会」が再び盛んに行われるようになりました。ちょうど学校の夏休みの最後の行事として、子どもたちが楽しみにしていたのです。

「お地蔵さん」のお祭りは、「お盆」とは異なる独立したお祭りですが、各家の「お盆」の行事のあとに、まるでその続きのような時期に行われることから、「地蔵盆」という名前で呼ばれるようになりました。

昭和の高度経済成長期には、京都の中心部から周辺に都市域が広がり、今までお地蔵さんのなかった新興住宅地やマンションでも、町内の行事として「地蔵盆」が積極的に取り入れられました。「地蔵盆」の開催に向けて、町内に昔から住んでいる人も、新しく越してきた人も、力を合わせて話し合いながら準備することが、町内に住む者同士の交流や連携、協力を強め、町内の防犯や防災にも役立ってきました。

近年は、子どもの減少や職住分離をはじめとする生活様式の変化などから、「地蔵盆」を簡略化したり、開催しなくなった地域もありますが、世代を越えて京都のまちに脈々と受け継がれてきた「地蔵盆」が果たしてきた役割を再認識し、時代の変化に対応しながら未来に引き継がれるよう、“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定しました。

京の夏の風物詩「地蔵盆」

「地蔵盆」で行われる行事は地域によって様々ですが、多くの町内で行われている行事をまとめてみました。



〈開催日〉

「地蔵盆」は、地蔵菩薩（ぼさつ）の縁日（旧暦 7 月 24 日、もしくは、新暦 8 月 24 日）の前日を中心に行われ、最近では、参加する人たちの都合に合わせ、その前後の土日に行うところが多くなっています。また、天道大日如来（てんどうだいにちによらい）を祀っている町内では、大日如来の縁日（旧暦 7 月 28 日、もしくは、新暦 8 月 28 日）を中心に行うところもありますが、それらも「地蔵盆」として行うところが多くなっています。

〈開催場所〉

お地蔵さんを祀った祠の前が多いようです。その他、個人宅や駐車場などの空き地、道路上、集会所、公園などで実施されています。

〈運営主体〉

町内会あるいは町内の子供会などが運営主体となって、町内単位に行われることがほとんどです。運営の担い手は大人が中心ですが、鉦（かね）や太鼓などで行事の開始を知らせる役割など、子どもも「地蔵盆」の運営に参画することで、世代間の交流が図られています。

また、最近では、「地蔵盆」を開催できない地域の住民のために、学区の自治会館などで「地蔵盆」を開催し、参加してもらうといった取組もあります。

町内で協力して行う「地蔵盆」

〈お地蔵さんのお化粧など〉

「地蔵盆」が近づくと、町内の人たちは、お地蔵さんを祠から出して、新たに彩色する「お化粧」を行い、新しい前掛けを着せます。

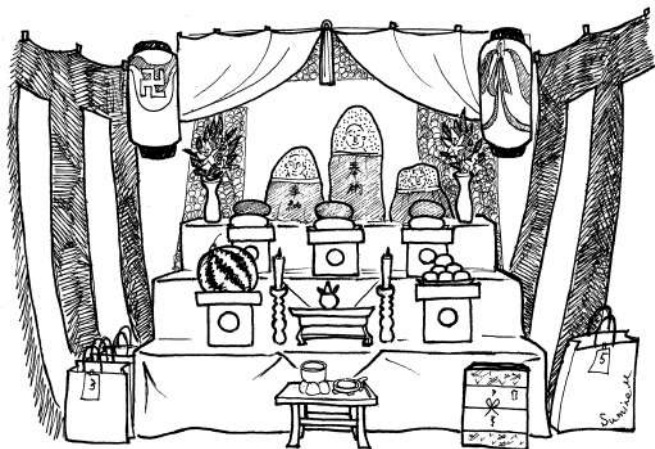
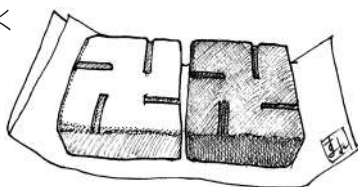
お地蔵さんが祀られていない町内は、寺院から借りたり、仏画を使用したりしています。



〈供物などの飾り付け〉

町内の人たちからお供えを集め、お地蔵さんを祀る祭壇に花や供物、地蔵幡（じぞうばた）と呼ばれるお札などを飾り付けます。火を灯した提灯に似ているところからホオズキをお飾りの花として使うこともあります。

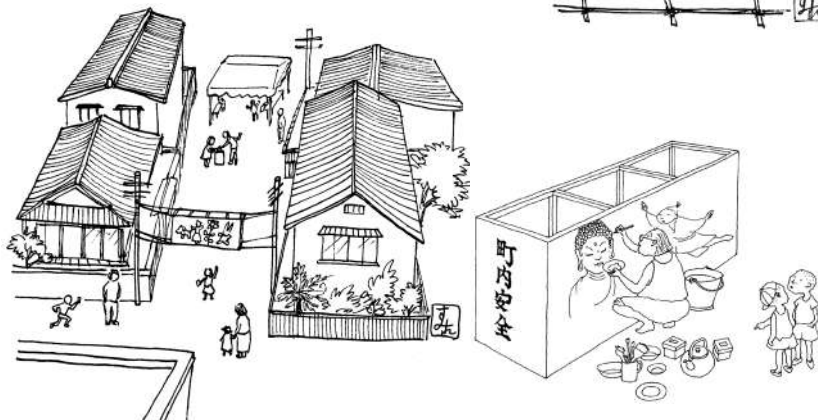
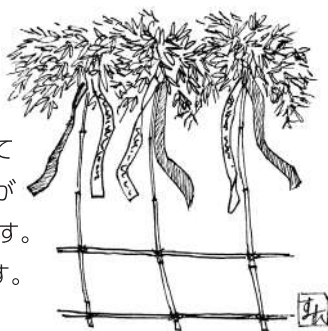
供物としては、紅白の餅や白雪糕（はくせんこう）といったお菓子、果物、精進物のお膳などが供えられます。



〈会場まわり〉

会場まわりは灯籠（とうろう）や行燈（あんどん）、提灯などで飾られます。

子どもが生まれると、健やかな成長を願ってその子の名前を書いた提灯が作られ、その子が「地蔵盆」に参加している間、毎年飾られます。また、青竹ののぼりを立てるところもあります。



灯籠や行燈にローソクを立て、夜の明かりを楽しむこともあります。また、「地蔵盆」の会場の入口に吊るす大きな行燈もあります。

行燈の絵は子どもたちが描くなど、大人だけでなく、子どもも「地蔵盆」の準備に参加することにより、世代間の交流が図られています。

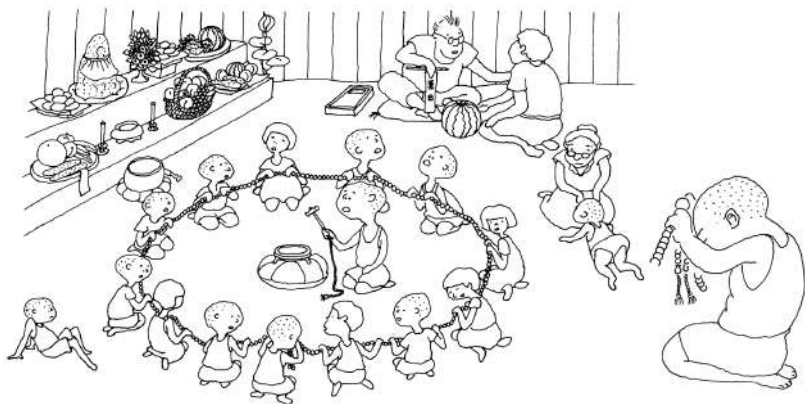


なお、最近では見られなくなりましたが、陶磁器や糸などの日用品を使って人形などをつくり、情景をしつらえる「作り物」もあります。

世代を越えて交流を図る「地蔵盆」

〈数珠まわしなどの伝統行事〉

「地蔵盆」は、僧侶による読経や法話で始まるところが多いようです。町内によっては、子どもたちが直径2～3メートルの大きな数珠を囲んで座り、大人もその輪に加わりながら僧侶の読経に合わせて順々に回す「数珠まわし」(百万遍(ひゃくまんべん)念仏の一種で、「数珠繰り」ともいう)が行われます。



こうした伝統的な行事だけでなく、お菓子の配布や手料理の振舞い、ゲーム大会、スイカ割りなど、子どもを主体とした様々な行事が行われます。

〈お菓子配り〉

子どもたちが喜ぶお菓子配りは、ほとんどの「地蔵盆」で行われています。そこに集まり、学年の違いを越えて隣近所の友達と一緒に遊んだ子どもの頃の経験は、「地蔵盆」の楽しい記憶として、大人になっても残り続けるものです。



〈手料理の振舞い〉

お菓子配りのほか、昼食あるいは夕食として町内の世話役による手料理が振る舞われることもあります。また、屋台が設けられるところもあります。

〈遊びのイベント〉

プログラムには、ゲーム大会など子ども向けの行事が並びます。夜になると花火大会や盆踊り、映画会などが行われるところもあります。また、大人だけの交流の場がもたれるところもあり、町内における貴重なコミュニケーションの機会ともなっています。

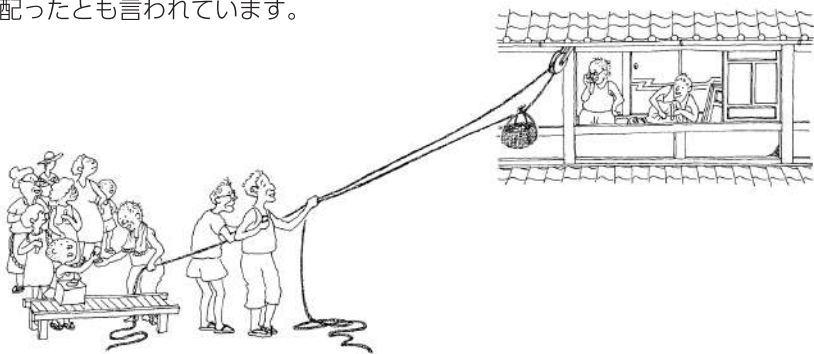
〈福引〉

子どもにとって最大の楽しみである福引は、主にプログラムの終盤に行われます。

「畚（ふご）おろし」といった昔ながらの形式で行うところもあります。「畚」とは「かご」のことで、くじで当たった景品をかごに入れて、家の2階などの高所から吊り降ろすものですが、こういった光景を見ることは最近では少なくなりました。

〈供物のお下がり〉

お菓子などの供物は、お下がりとして子どもたちに配布されます。夏の終わりに体力を消耗した子どもたちの栄養を補給しようという意味で白雪糕を配ったとも言われています。



町内を見守るお地蔵さん

「地蔵盆」が終わると、祠から移動させたお地蔵さんは元の場所に戻ります。町内の住民は、日頃から感謝の気持ちを込め、お地蔵さんの前で手を合わせ、祠を綺麗に掃除し、新しい花を活けます。大都市でありながら、まちの辻々で見かけるこうした光景は京都ならではのものです。

身近な存在なのに、実はよく知らない!?

お地蔵さんは「地蔵菩薩」が由来

地蔵菩薩は、お釈迦様が亡くなってその生まれ変わりとして弥勒菩薩がこの世に現れるまでの間（56億7000万年間）、人々を救うのが役割です。



お坊さんと同じく、頭には宝冠も髪もありません。お寺などに安置される仏像としての地蔵菩薩は、瓔珞

（ようらく）を付け、左手には宝珠（ほうじゅ）を持ち、右手は手のひらを見せて前に下げるか、錫杖（しゃくじょう）を持っています。しかし、道端で見る「お地蔵さん」は、頭が円いだけで、まるで丸坊主の子どものようです。

なかには宝冠を付けたものも混じっていて、本当は大日如来なのですが、それも「お地蔵さん」と呼ばれています。

つまり、「お地蔵さん」は、地蔵菩薩であることを超え、広く民俗信仰の対象となっているのです。

